

米国と北朝鮮が手を結びました。大きなニュースです。今後の進展については分かりませんが平和に向かつて進んでいってほしいものです。水清ければ大魚なし、察政なれば下和を得ず、との明言在り。下の者と調和を取りながら上手くやっていける党首と違い、米国も北朝鮮も同じようなタイプの党首と思いますので今後の進展に目が離せません。お釈迦様は怒りと傲慢を捨てろとおっしゃいました。怒り（錨）を下ろしましょう。そして万民が平和に暮らしましょう。日本においては拉致問題が解決し多くの拉致された方々が帰国されれば幸いです。時は今、この問題から離れ日本のメディアはサッカーの日本代表がW杯で活躍する話題で持ち切りです。世界中で活躍される日本人に敬意を表します。

佐藤愛子女史のお母様は教えとして、人として「**いざという時に役に立てばいい**」と子供に教えたそうです。その著の中で 機会は合理的生活を女にもたらし、女を肉体の疲労や家事の煩雑さからある程度解放した。・・・だがその時、私たちは素朴な女の喜びを失ってしまう。代々の子供の心の中に最も素朴な形で生きて来たお母さんのイメージも消滅してしまうのである」と。今の母親が世の為人の為になる我が子をどのような方法で導いていくのか、身体が大きく成長しても心は貧弱で社会のせいにして逃避し誰でも良かったとか、親・兄弟・肉親を殺害してみたり、育て方の失敗としか思えないのです。全ての目的が金に固執する育て方では赤子の清浄なる心が黒く染まってしまう。黒く染まった心を白くするのは容易ではありません。不可能に近いのです。生活の中で音は重要な役割を担っています。音、音階は我々の気持ちを時に静め時に高揚させます。お母さんが台所で料理を作る時に出る音は子供にとって大切な思い出となりますし、仕事の種類によって様々な音に接しますと、音の響きが物の形成を導き出します。音楽は人間の心を弄びます。上手下手も当然ありますが楽器の種類や多さもあります。手前味噌ですが大勢の坊さんが称える読経や聲明も皆様を陶醉させます。佐藤愛子女史は心霊体験のある方です。「生きる事の辛さ苦しさに疲れ自殺をする人がいる。何もかもなくなってしまう無の世界へ行きたいと思つて死を選ぶ。しかし死んでも何もかもなくなるというわけにはいかないのです。彼が引きずっている情念が浄化されない限り苦しみはつづく。苦しくてたまらないので、もう一度死に直そうとする。そこへ霊媒体質の人がやって来るとその人に憑依して電車で飛び込ませる。一緒にもう一度死ぬつもりなのである。自殺者の霊は二人になって次の犠牲者を引っ張る。それが増えて地縛霊団となり、魔の踏切」魔の淵」などといわれるようになっていくということである」。度々私は同じような説明を檀信徒の方にします。特に事故自殺等の起きた場所にはなるべく近づかないようにしましょう。と、引っ張られる可能性があるからです。当然理解できる人と、できない人に分かれますが霊の供養をする立場の者として説明をしています。結縁盆施餓鬼法要二十六日九時〜